

## ソ連の印象

— その中国への対応と現状 —

小 林 文 男

- I 官僚主義の壁
- II ソ連における中国研究
- III 若い世代にみる中国・アジア観
- IV “西”への傾斜をかきたてるもの

## I 官僚主義の壁

ソ連社会主義の現実をみ、そこに住む人びとの意識に直接触れてみたいという希いは、私の多年来の夢であった。なぜなら、中ソ論争以来、とかく問題化されるようになったソ連社会の実態というものが、本当に中国の指摘するように矛盾に満ちたものであり、文字どおり「修正主義」「社会帝国主義」であるのかどうか、また、レーニンの精神とその革命伝統がすでに失われたといわれているが、それがどの点で失われたのか、これらのことをじかに観察してみたかったからである。したがって、小説『人間の条件』の主人公梶をしていわしめた「約束の地、ソ連」というイメージが、私の脳裡に残存していたわけではまったくくない。私はソ連社会の現実をみることによって、私の専門とする中国、その社会主義との相違と問題点を、もう一度原点にもどって考え直したいと思ったのである。そして、できることならば、日中正常化に対するソ連の対応と、正常化以後のソ連のアジアへのかかわりが、どのようなものになるであろうかについて、ソ連の中国・アジア関係者と話し合うことで、その中国観を含めてのアジア観、それを支える思想と風土、そのことを少しでも知りたいと考えたのである。ソ連・東欧4カ国、約1カ月半の旅程において、期間・エネルギーとも、ソ連の理解にその大部分をついやしたのも、このためであった。

しかし、今日のソ連、現実のソ連は、このような私の願望をすべて充足させてくれるものでは、決してなかった。モスクワに着いてまず直面したのが想像以上に固い官僚主義の壁、言葉をかえていえば一種の権威主義とも

いふべき格式の高さ、これだったからである。あらかじめのアポイントはもちろん、とくに有力な紹介状を持たなかった私は、当然のことながら、どこでも単なる「ツーリスト」として扱われ、学者・専門家との面会、機関見学の希望などは、その大部分が第一歩において冷たい拒絶にあったからである。聞いてはいたが、電話で交渉の成立する国ではなかったのである。しかも、寒さと雪、モスクワの12月はまさに厳冬であり、これに堪えられなければ、戸外では何一つ用務のはたせぬ季節であった。いきおい、モスクワ到着から数日間、クレムリン・レーニン廟の参観は別としても、街をほつつき、商店・デパートを覗き、観劇に夜をすごす等、ひねもすいわゆる「見聞を広める」ことに時を取られたのも、ゆえなきとしないのである。そして、その間に得たソ連社会に対する私の印象は、「良きにせよ悪しきにせよ、ソ連はきわめて安定している。しかし、また予想以上に貧しい」ということ、さらに「ソ連からみて、中国は、そしてアジアは遠い」ということ、これであつたと思う。私のロシア語の貧しい知識をもってしては、これ以上のことはわからなかったのである。

にもかかわらず、私がかかりなりにも所期の目的に即して、ソ連の中国観、アジア観をある程度まで理解することができ、想像以上に根深い中ソ対立の淵源にまで立ち入ることができたのは、執拗なまでの電話交渉の甲斐あってエム・イー・スラドコフスキー教授と連絡がついたこと、ふとした機会から知り合ったソ連の技術者セルゲユ青年の献身的な協力によるものであった。ス教授は、ソ連邦科学アカデミー会員、同極東研究所長で、ソ連では同じくアカデミーの東洋研究所中国部長であるレフ・デリューシン教授とともに、中国研究者としてはもっとも業績の多い、かつ著名な学者である。私と教授とは、昨年春の教授の来日の際に知り合い、わが研究所で教授を囲んでの討論会を開いて以来の、いわば旧知の間柄であった。ス教授が、アカデミー関係の調査に関して

できうるかぎりの便宜をはかってくれたことは、いうまでもない。私は指定された日時に極東研究所を訪問、ス教授以下、副所長・部長クラスの担当研究者多数と半日以上におよぶ討論を展開することができ、そこでソ連の中国・アジア研究の現状と問題点を、比較的詳細に理解できたのである。また、セルゲーユ青年には、大学をはじめとして三つの機関訪問に同行してもらったほか、彼のおよぶかぎりの友人・知己を紹介してもらい、それらの人びととの対話の場を、いくつも作ってもらった。私は、これによって現代ソ連の青年が何を考え、何を意図しているか、社会主義の現実と未来に何を期待しているか、さらに中ソ対立をどのように理解し、中国をどのような眼で見ているか、また、対米・対日観等々、若いソビエト市民の政治意識のいく分たりとも知ることができたのである。私は、セ氏をとおして世界に類例をみないというロシア人の「人の良さ」「正直さ」に触れた思いであった。モスクワ到着直後に私が知覚したソ連官僚主義の壁は、一人の“権威”と一人の“善意”によって打ち破られたのである。私はそう考えている。

それだけに、いい古された官僚主義のもたらす害毒の実例や、資本主義社会からこの国を訪れるものを悩ましてやまぬソ連体制のもつ非能率性については、ここではこれ以上語るめ方がよいであろう。私は、ソ連は中国をどう考え、ソ連の国民はアジアを、そして世界をどう認識しているか、このことについて以上の見聞に即しての私の感想を記すだけにとどめておきたい。ただ、いえることは、これも私どもを魅了してやまぬ、したがって、私どもの社会ではみることのできぬ中国社会主義の哲学「為人民服務」（人民に奉仕せよ）は、同じ社会主義の国ではあっても、ソ連の社会には稀薄であり、こと組織にはいはって絶無であったということである。サービスを仕事とするホテルの“サービス・ビューロー”が、逆に客に対して“サービス”を求めるといふ社会、また、レストランのウエイトレスがチップなしでは動こうとしない現実、これがソ連体制のもつ一つの顔であることは、私の体験にてもまぎれもない事実であった。ソ連に対する私の最初の印象「中国は遠い」という感覚も、このことと無縁ではなかったと思う。

## II ソ連における中国研究

ス教授をはじめとする科学アカデミーの中国学者との討論の焦点は、中ソ関係、とりわけ中ソ対立の淵源についてであった。教授らの見解は、予想されたものではあ

ったが、中ソ対立の原因を一方的に中国の側、具体的には中国指導部の責任に求めたもので、ソ連側は中華人民共和国成立以後、中国に対する関係のしかたにおいては、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の原則から「一度も外れたことがない」といい、マルクス主義の普遍性を否定し、民族排外主義を実行したのは中国であり、中国の国際共産主義運動の主導権獲得への野心が、国際共産主義運動の団結を乱し、中ソ間の不幸な対立をもたらしたものだ、というものであった。「その証拠に」とある研究者は、つぎのようにいったのである。

「私たちは、人民公社が成立して以後、中国が経済的にもっとも大きな困難におちいった時期に中国に赴き、心からの援助をおこなおうとしたが、中国はこれを拒否し、中国人はわれわれにいわれのない悪口を投げつけた。中国指導部が中国人民に対して民族排外主義を宣伝していたのは、明らかな事実です。なぜなら、新中国が成立してから10年のあいだ、わが国が中国に対してどれだけの援助をしたか、それに対して中国が当初どれほど感謝していたかは、第1次5カ年計画期全体をとおして、中国がすべてをわが国から学ぶことを国家的スローガンにしていたことから、はっきりしているからです。しかるに、中国は一時期の特殊な経験の成功『大躍進』を、社会主義建設の普遍性におきかえ、これに対してわが国が『経済合理性を無視したもの』として批判すると、すぐに体面を傷つけられたとして猛然と反抗してきたのです。これは中国人が排外主義的・大国主義的性格の強い民族であることを示しています。そして、これはマルクス主義とは無縁なものです。事実、文化革命をおこない、これこそマルクス・レーニン主義の最高の形態であるといいましたが、これが何の益にもならなかったとすると、今度は文革はゆきすぎであったといい、すべての責任と罪を林彪になすりつけようとしています。そして昨年まで最大に敵視していたアメリカ帝国主義と手を結ぼうとしています。ここには一片のマルクス主義の原則すらないと思えます。マルクス主義の原則にそって、今日の中国を理解することは、もはや困難であるといえましょう」

ここには、中国に対する不信と疑惑がみち満ちており、文献ではわかっている、予想以上に根強いソ連人の中国不信観に、私は改めて一驚せざるをえなかった。しかも、この人たちはいずれも中ソ対立顕在化以前の、1950年代から60年代の初めにかけて数年にわたり中国に滞在

した人たちであり、その意味では中国をよく知っている人たちである。中国語が流暢なことは、とうてい私などのおよぶところではなかった。それだけに、中ソの和解などは、とうてい考えられていないかに思えたのも、当然であろう。「中国の指導部と人民は違う」といながらも、そこには指導部、毛沢東政権というだけでなく、それを支える総体としての中国人、中国民族への忌避が、中ソ論争以後、とりわけ文化大革命の展開にあらわれた中国人の行動様式の評価のなかに、散見できたからであった。マルクス主義の普遍性と国による特殊性を語りあった時、ソ連の学者のいう普遍性がソ連のみ適用されているかの言説が飛び出したこと、中国を特殊化するあまり、これをアジア的社会（アジア的停滞性といってもよいかもしれない）の封建遺制の残存を認めるかのようなとらえ方において発想している印象をうけたこと、いいかえれば、ソ連型革命＝社会主義を普遍的なものとして固定化している感のあったことは否定できなかったのである。このことは、ヨーロッパとアジアの「階級理解の相違」を語った時、ベー・ハー・フクヨロフ教授から、「歴史的にみても西洋と東洋とでは、階級分析の方法がちがいで、中国は本質的にマルクス主義的階級規定の理解ができていない」との発言があったことから裏づけられるように思う。フ教授によると、文革の過程で紅衛兵らが「打倒の対象」としたものは、階級などではまったくないというのであった。私はかつて、中ソ論争にあらわれた中国とソ連の階級認識の区分と相違を問題にしたことがあるだけに、このフ教授の言には非常に興味を覚えたが、時間の関係で、問題が深化できなかったのが残念であった（拙稿「文化革命の理論と実践」〔『アジア経済』第7巻第9号〕、および「文化大革命の論理」〔『エコノミスト』昭和42年10月9日号〕）。

このほか、アカデミーでの討論では、周恩来政権の性格規定、台湾問題、ベトナム問題、日中正常化の意義づけ等、多岐にわたる意見の交換とソ連側の卒直な見解を聴取した。もちろん、討論の過程では、私とソ連側とのあいだにはあきらかな意見の相違がずい分と存在した。しかし、日中正常化の問題にかぎっていえば、同席した学者はすべて、「問題はあるが、歓迎すべき画期的な出来事」として評価し、「アジアの平和にとって大きな貢献」であることを、異口同音に強調されたのである。ただ、「問題はあるが……」というその問題は、それが「遅すぎたこと」「日本国民のペースで動いたものでなかった」ことであったことは、意外といえ意外であった。

なぜなら、私が予想していた「日中共同声明がソ連を意識したものである」との、新聞報道等巻問の評価は、この席ではまったく出なかったからである。あとになってだが、ソ連政府のある高官が大平外相訪ソの際、日中共同声明に対してきわめて批判的な言明をおこなったということ、滞ソ中のある日本人から聞いたが、このこととアカデミーの学者の対応とは実に対照的であったと思う。学者と政治家の違いは、やはりあるのであろう。

だが、それにしても、今日の中ソ関係の現状を反映して、ソ連の学者がいちばん困惑していたのは、中国の資料がはいらぬこと、したがって、正確な現状把握と分析が不十分にしかできないということであった。このことは、討論の過程でもしばしば口にされただけでなく、「日本の研究者に期待している」という言に、よくあらわれていたと思う。そのため、研究領域がどうしても限定され、歴史的研究にウエイトがおかれざるをえないことは、極東研究所刊行の季刊雑誌『極東の諸問題』（ПРОБЛЕМЫ ДАЛЬНЕГО ВОСТОКА）収録の中国関係論文を読めばよくわかることであり、同研究所刊行の中国関係単行本の性格に、あきらかに反映していたと思う。滞ソ中に、私がみることのできたおもな中国研究文献は、つぎのようなものであったが、一見して、いずれも中国革命史、中共党史、中ソ関係史など、歴史的分野のものばかりである。

エス・エリ・ティフヴィンスキー『孫文、その対外政策の観点と実践——1885年より1925年までの中国人民の民族解放闘争史』（1964年）

エヌ・ゲ・セニン『孫文の政治・社会および哲学的観点』（1965年）

エム・イ・スラドコフスキー他三氏編『中国革命に関係したおもなソ連共産主義者』（1970年）

極東研究所編『中国に対するレーニンの政策』

東洋研究所、極東研究所共編『17世紀の中ソ関係』I（1970年）

極東研究所編『10月革命とソ連の中国学の発展』

ゲ・デ・スハルチュク他『中国の地理と経済』（1967年）

エム・エス・カーピツァ『中華人民共和国——その20年間における二つの政策』（1969年）

ベー・ハー・フクヨロフ、エム・イ・スラドコフスキー編『最新中国史——1917～1970——』（1972年）

もっとも、これらは一つの傾向であって、ソ連の中国研究のすべてを語っているものではない。現状分析を含

めての中国研究も決してないわけでないことは、極東研究所が多数のメンバーを動員して編集した最新刊の『現代中国』(СОВРЕМЕННЫЙ КИТАЙ, 1972)の存在によっても理解できることである。しかし、いまのところ、現状分析イコール中国批判にならざるをえないこの国の事情からいえば、正確かつ客観的な現状分析は、前述した資料・情報の不足もあいまって、なおしばらくは不可能であろうことは、否めがたいと思う。「日本の研究者に期待している」というのは、訪中が活発化しつつある日本の現実を考えるならば、決してお世辞とはいえないのである。また、今堀教授(広島大)の著作が話題になったのも、そのことの一端を示している。

ちなみにいえば、ソ連邦科学アカデミー極東研究所の構成は、所長、副所長(3名)、部長、課、グループという組織系統からなっており、中国研究に関しては、政治、経済、思想、文化、民族問題、対外政策の6部を有し、130名あまりのスタッフを擁していた。また、同アカデミーには、東洋学研究所に所属する中国学図書館をはじめ、社会科学基礎資料図書館、レーニン外国資料図書館があった。

### III 若い世代にみる中国・アジア観

ところで、以上のような中国研究、そこで造出される中国像・中国観は、体制が体制であるだけに、当然のことながら、一般のソ連国民の意識に強く反映せざるをえない。このことは、前述のセルゲエウ氏とともに会見したモスクワ大学のある学生が、「中国といえば、思い出すのは、子供の頃に両親とともに食べた中華料理であって、あとは毛バッチをつけた気遣いの少年の行進(紅衛兵のこと、筆者)ですわ」といい、「後進国革命は、ああいう形をとまらうのかもしれませんが」というだけの中国認識しか持ち合わせていなかったこと、自らコムソモール(共産青年同盟)員だと語り、それも幹部であることを自称した教師であるある青年が「マルクス・レーニン主義の原則から逸脱した今日の中国には、まったく関心がない」と前置きし、中国がマルクス主義を理解していないこと、中国のソ連批判には社会の発展段階を無視した独断のあること、人力で戦車には勝てないこと、ソ連は中国を少しも恐れていないこと、等々をインテリらしくきわめて論理的に語ってくれたことで、証明されることであろう。「中国の文学を何か読んだことがあるか」との私の質問に、彼は「まったくないし、読みたくもない。けれども映画は観たことがある」と答えてくれた。また

ある労働者は、「中国人には芸術がわからないし、生活水準の向上をめざす気持もない。たとえば、われわれがチャイコフスキーを革命的芸術家だといっても、西洋音楽を頭から拒否する彼らには、毛沢東の歌しか芸術ではないらしい」というのであった。

もちろん、これらは一部の人びとの声であって、ソ連国民の中国観をこれによって代表させるものではないであろう。しかし、中華料理しか中国に対して関心と呼び起こさないという態度、中国人には芸術がわからないとして突き放す対応の仕方は、あきらかに「教育」によってつくりあげられたものであって、そのことはソ連国内に中国を想起させるものが何一つない、ということと決して無関係ではないと思う。モスクワ、レニングラードと歩いて、中国の書籍・新聞を置いている書店が1軒もなかったことは、それを示している。私がインタビューした範囲でいえば、年配の人、前述の学者の人たちは別として、若い世代の人びとは、中国人を写真でしか見たことがないというのであった。「中国人はどんな顔をしているのか」と問われ、「服装は違うが、私と同じような顔だ」と答えた経験は、冗談ではなく、本当にあったことなのである。かつて、モスクワには数万におよぶ中国人が、留学生として、技術者として、また、その他の用務をもって往来した。しかし、いまその記憶はソ連国民のあいだから急速に薄れ、その後の「教育」と体制ぐるみの反中国宣伝によって、中国は、かつての日本がそうであったように、いや、それ以上に「遠い国」「遙けき国」と化したようである。私は、国家利益の前には、社会主義の連帯も、プロレタリア国際主義も、所詮は単なる言葉、念仏にすぎないことを、ソ連の青年たちと話すなかで、いやというほど思い知らされた思いであった。一般ソ連人の意識のなかには、「進んだソ連、遅れた中国」という発想が、あきらかにあると思う。このことは、日本人である私に対しては「われわれは日本人を尊敬しており、日本は高度文明国、経済大国である」といったことでも、あきらかであろう。「尊敬」と「経済大国」とを結びつける発想は、裏返していえば、政治的・イデオロギー的矛盾と葛藤からくる条件を一応措いても、「遅れているもの」への軽侮を意味するからであった。

そして、以上のことは、ひとり中国に対する対応にみられただけでなく、ベトナム問題への感想に対しても、ベトナム人民の抵抗の源泉が何に由来しているかということへの関心よりも、ソ連がベトナムをいかに支援して

いるかということ、そのことにより力点がおかれていたことからも窺えることであった。「ベトナムに対して中国は何をしましたか。精神的支援でベトナム人が戦えるでしょうか」。これは、レニングラードで会ったある教授がいったことだが、この人によると中国は「近代戦の何たるかを理解していない」のだというのである。ソ連がベトナム戦争にどれだけの援助を投入したか、また、これに比して中国がどの程度までの援助をおこなったか、その実績は私にはわからない。けれども、そのようなことではなく、私の知りたかったのは世界最強の国家の侵略に対して、長年にわたって抗しながら一歩も後退しようとしないうベトナム人民の“心”を、ソ連の知識人として、また革命をやりとげた共産主義者としてどう評価しているかであったのだが、そのことへの感想はついに聞かれなかった。単に「偉大である」というだけでは、答えにならないからである。話は前後するが、私はその後チェコのプラハで、また、ポーランドの大学で「ベトナム人民を支援しよう」とのスローガンを見たが、ソ連の大学ではついぞそのようなもののあるのを、見落してしまった。なお、ソ連とアジアを含む発展途上国の関係については、ノーボスチ通信社発行の英文による *THE SOVIET UNION AND DEVELOPING COUNTRIES 1972*、という書物がでていたが、全文、経済援助の実績の誇示に終始していた。

このように、ソ連の青年の中国観・アジア観は、多年来の中ソ対立の政治的状況下において完全に一種の固定化現象を示し、ある意味では歪められてしまったように思う。そして、この歪みはおそらく再生不可能なものであろう。というのは、本来、もっとも変革に対して敏感であり、革命イデオロギーの生成に対しては、国境をこえてその情熱を傾注すべき青年において、そうでないという状況は、体制の維持と安定化には寄与しえても、それ以上のものにはなりえないからである。私はいくどとなく、レーニンの『青年同盟の任務』を持ちだし、中国の現状、中国の青年との思想的接点をソ連の青年に見出そうとこころみただが、ある者は「段階が違う」といい、また、ある人は「革命の時代ではない」と笑うだけであった。「ドイツにどう追いつくか、ドイツ並みの水準にどうしたら追いつけるか、これは口にごそしなが、われわれの希望なのです」。返ってきた答えは、つねにこうであった。事実、私に最後まで協力してくれたセルゲエフ青年すら、「今日のソ連の青年にとって中国など問題でないのです。アジアの問題は二の次なのです。今日

のソ連は、社会主義の優位性を土台として、西ドイツに對抗することなのです」といったのである。セ氏を含めて多くの青年たちが、今日のソ連体制、すなわちブレジネフ政権に全面的な信頼を寄せ、これを支持していたことはいうまでもない。「ソ連からみて、中国は遠く、アジアは遠い」という私の最初の印象は、この点からいっても、決してまちがったものではなかったと思う。

私は、レーニンの『青年同盟の任務』のある章句を、時として思い出すことがある。この章句は、かつてソ連の青年の血をわき立たせたものであり、いまは中国の青年の実践の指針であろう。だが、今日のソ連の青年は暗記どころか、これが『レーニン全集』のどの巻にあるかすら覚えていない。中国も「遠い」が、レーニンもまた遠くなりつつあるのが、今日のソ連の若い世代の平均的意識形態ではなからうか。参考までに、問題のレーニンの章句をかかげておく。

「共産主義的青年の教育は、かれらにあらゆる種類のこころよい演説や、徳性の基準をあたえることにあってはならない。教育はそんなところにあるのではない。自分の父母が地主や資本家の圧制のもとでどんな生活をしたかを知ったとき、搾取者にたいする闘争をはじめのものにおそいかかる苦難を自分で体験したとき、たたかいたった成果をまもるためにこの闘争をつづけることが、どれほど多くの犠牲を要するか、地主や資本家がいかに狂暴な敵であるかを知ったとき、これらの人びとは、このような状況のなかで教育されて共産主義者となるのである……。

もし学習、教育陶冶が学校のなかにだけ追いかまれ、激しい実生活からきり離されたものであるなら、われわれはこれを信用しないだろう」(『レーニン全集』第31巻)。

#### IV “西”への傾斜をかきたてるもの

しかし、考えてみるとソ連を、中国から、そしてアジアから遠ざけたものは、ひとり中ソ論争、中ソ対立の激化だけではなかったかもしれない。ひとたび西に眼を転じると、そこには1956年のハンガリー暴動を起点として、ポーランドの叛乱、チェコの“自由化”、ルーマニアの自主路線＝対米微笑、等々、50年代から60年代いっぱいにかけての、いわゆる東欧の「対ソ造反」が相ついでいたからであり、そこにはソビエト体制の崩壊を意図する影の力が、たえず大きく作用していたからである。そしてこれらの国ぐにと隣り合せる西ドイツの強力な発展は、ソ連にとって政治的にも経済的にも、おそらくアメリカ

以上の大きな脅威をもたらしていたに違いないからである。ソ連が必定、西ドイツを意識しつつ、国内体制の安定化を図り、東欧諸国とのこれ以上のまきつを避けたいと考えたのは、当然であった。ソ連の対東欧政策が一貫性を欠き、鞭をかくしながら飴をさしだす、ある面での柔軟性をもたざるをえなかったのも、すべて西ドイツの経済的思想的攻勢に対処するためであった。もちろん、ソ連のこのような対西ドイツ意識の底流には、かつての戦争体験、ナチスの侵略という歴史体験がオーバー・ラップしていることも、否めないであろう。ソ連は第2次大戦において2500万の人間を、ドイツによって殺されたからである。したがって、ドイツ並みの生活水準を確保すること、ドイツ並みの技術を一般化することは、国内体制を安定化させるだけでなく、東欧社会主義圏の結束と結合を保持するうえでも、ソ連にとってはいわば「至上命令」であったわけである。

事実、ソ連国内ではそう目立たなかったが、チェコ、ポーランド、ハンガリー等には、ドイツ商品があふれ、ドイツ人が闊歩しているさまは、まさにドイツの技術と経済力をこれら諸国に誇示しているかの観があり、ショウウィンドウ越しにこれを見ているこの国の人たちは、自国製の劣悪品とくらべてか、ため息をついていたのである。しかし、ドイツを意識するソ連の経済建設が、その願望どおりに進まないことは、ここ数年来の農業不振とベトナム援助をかかえているソ連をめぐる内外情勢からいって当然のことであり、ドイツ並みの生活水準のスローガンは、民衆レベルにおける輸入品や旅行者の服装・所持品を媒介として形成された対西欧美化イメージを、増大させるものでしかなかった。けれども、それが近い将来に「実現できるであろう」との夢だけは確実にあり、それがあがる以上、中国的状態への回帰は、ソ連の威信にかけてありえないのである。前節でみたソ連の青年たちが異口同音に中国を問題にせず、ドイツ並み西欧水準の生活への希求を吐露したのも、こう考えてくるとよく理解できることであろう。

もちろん、ソ連が中国を、そしてアジアを「遠ざけた」理由は、以上のような国際情勢の要因だけで説明できるものではない。以上のことは、いってみれば、政治のダイナミズムがソ連をしてある状況下に追いこんだというだけのことであり、より本質的には、ソ連はヨーロッパであり、生活・習慣・思考のすべてにおいてアジアとは異なる伝統と歴史によってなりたっている社会であって、アジアよりはヨーロッパに接近せざるをえない必然

性をもっていることは、当然のことであろう。このことは、ソ連市民の日常生活を少しでも垣間みればすぐにはわかることであって、彼らは生活を「楽しむもの」として認識しており、美味しいものを食べ、歌い、踊り、飲むことが、人生であると考えている。男女関係、道徳観においても、その対応はおよそアジア人とは違うのである。したがって、中国的「禁欲主義」や東洋的「沈黙」を、彼らは感覚的に受けつけないし、そのようなものを美德とはまったく考えていないのである。かつて、フルシチョフは中国に対して「スポンもはかないで原爆の開発に奔走する愚か者」といったが、まさにこのようにしかアジアをとらえられないのが、ソ連なのだと思う。とすれば、ソ連国民にとって中国がおかしなものに映ること、遠い存在でしかないことはあきらかであって、ソ連をあたかもアジアと同質であるかのようにみ、またみせてきた50年代の状況というものは、実に当時の政治関係のつくり出した虚像でしかなかったといえよう。私はソ連の生活とソ連国民の行動様式を目撃するなかで、中国にとってもソ連は「遠い」のではないか、不可解なのではないか、と思わざるをえなかった。

中ソ論争が一見、イデオロギー論争の装いをもち、実際、そのなかにはマルクス、レーニンの教説が無数に現出されているのであるが、相互がどのような理論と言辞をもって飾ろうとも、その前提になっているのは、ヨーロッパとアジアの相違、精神的距離感の「遠さ」にあるのではないかであろうか。

最後になったが、私は今回の調査旅行をとおして、実にさまざまなことを考えさせられた。その第1は、社会主義の多様性ということであり、第2は、中国社会主義のもつ特殊性ということであり、第3は、以上2点のかかわりにおける既成の社会主義観の修正の必要性ということであった。また、東欧3国を歩きながらこれらとドイツとの関係をみるにつけて、日中関係の正常化の意味を改めて考え直したということも、付け加えておかねばならないであろう。奇妙なことに、私はソ連とヨーロッパをみて、中国が以前よりも少しくわかったという気がしたのである。現代ヨーロッパにおける世界的マルクス学者であり、中国学者でもあるハンガリーのF・テーケー博士と面談し、大きな示唆を与えられたことについても、当然、報告しておかねばならないであろう。しかし、すでに紙数がつきてしまった。これらについては、東欧の現状紹介を含めて、機会を改め論じたいと思う。

(調査研究部)